

福田 英輝

はじめに

今回は、これら目標項目の評価と目標達成に向けたこれまでの取り組みを紹介します。また、最終評価を通じて見えてきた課題について説明します。

目標と評価

① 口腔機能の維持・向上(60歳代における咀嚼良好者の割合の増加)

咀嚼良好者の割合とは、国民健康・栄養調査の「かんで食べる」ときの状態に関する質問に対して「何でもかんで食べることができ」と回答した者の割合です。60歳代における咀嚼良好者の割合は、策定時(平成21年)73・4%、最終評価時(令和元年)71・5%であり、統計学的な変化が見られなかったことから、C「変わらない」と評価されました。

歯の要予防

② 歯の喪失防止

歯の喪失防止については、以下、3つの
価値項目が設定されました。

ア「80歳で20歯以上の自分の歯を有する者
割合の増加」

イ「60歳で24歯以上の自分の歯を有する者
割合の増加」

ウ「40歳で喪失歯のない者の割合の増加」



これまでの取り組み

乳幼児・学年期の2人の割合が増加した。以下、この詳細項目を設定してみた。

③ 3歳児以下・6歳児以下の割合が80%以上
④ 6歳児以上の割合が80%以上
⑤ 12歳児以上の割合が80%以上

ある道府県の増加
3歳児以下・6歳児の割合が80%以上である道府県は、戦時時平成21年6で、たが、最終計時平成30年は44増加した。しかしながら、目標値47を達成しなかったため、B現時点では目標値47では22、たが、改訂後推定と同一水準とした。12歳児の人口平均年齢が10歳未満である道府県に多いのは、戦時時平成21年6で、最終計時平成30年には増加した。たが、目標値47を達成しなかった。Aと同様にB評価で。

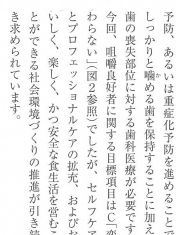
Aとの詳細項目は、いれもB評価で。たが、中間計時には当初目標値では72、たが、最終計時平成30年には増加した。たが、目標値47を達成しなかった。Aと同様にB評価で。

⑤ 戦時10年間に歯科検診を受けた者の割合の増加
過去10年間に歯科検診を受けた者は、国民健康・栄養調査から算定されます。

が、命令や年間の中止により、最終評価が多くなったため、E、F評価困難と判定されました。

③ 参考指標として、都道府県等におけるアンケート調査等の過去年度の歯科検診を受診した者の割合を再集計したところ、少くとも増加傾向を示しており、10数地区でも減少していないことが推測されました。

これらのことから、歯科検診の受診機会拡大を図るべく、歯科検診指導者（以下、指導者）として、1歳の発育予防（高いE、F評価）を有する7歳児に用いる事業が実施されています。乳幼児から歯磨剤に関する歯科検診指導、乳幼児を対象としたラッパ吹奏会、物入れ布草車、あるいは保育所・幼稚園にお

[illegible]